

課題名 「アジアの寄生虫症へのアジア独自の戦略研究」
代表者名 「矢野 明彦」
中核機関名 「千葉大学」

課題の目標・概要

1. 目的

1998年の世界保健機関決定、1998年G8サミットおよび2001年沖縄サミットで寄生虫症・感染症対策が重要課題として確認されている。世界的にも重要な寄生虫症流行地域であるアジアの発展を考えていく上で、地理的要因を考慮した寄生虫症対策は不可欠である。今後の学際的方向を具体的に決めるためにアジアの民俗、文化、経済体制、宗教など様々な多様性を越えて共通の特徴を把握し、科学と国際保健の立場からアジアの寄生虫学を再整理し、アジアの寄生虫学者間の協力体制の樹立が必要である。日本の寄生虫学者が中心となりアジア諸国の寄生虫学者が集まり設立した「アジア寄生虫学者連盟(FAP)」を中心として、アジアの寄生虫学に関するデータ保存と寄生虫症対策の確立は、寄生虫症対策に実績のある日本がリーダーシップを發揮するのが適当である。

2. 内容

以下の課題について国内およびアジア諸国の寄生虫学者との連携で行う。

- 1) アジアの寄生虫学の情報交換・共有化ための国際シンポジウムの開催
- 2) 課題研究の目的達成のためのアジア各国への日本研究者の派遣
- 3) アジア諸国の寄生虫症・寄生虫学研究の総大成として「Asian Parasitology(アジアの寄生虫学)」の編纂・刊行
- 4) アジア諸国の寄生虫疾患・寄生虫学の情報交換・共有化のためのホームページ開設およびOn Line Journalの刊行

3. アジア諸国とのパートナーシップの観点

日本のリーダーシップによるFAPを中心とした協力体制のもとで以上の課題の継続的活動を通してパートナーシップを強化させる。

4. 複数機関間連携の必要性

従来から行われている日本とアジア諸国間セミナー組織や共同研究経験者を中心にして本課題を遂行するため。

5. 推進委員会を構成する機関・組織等

アジア寄生虫学者連盟、日本寄生虫学会、日本衛生動物学会、日本熱帯医学会、日本獣医学会、日本寄生虫予防会、ソウル大学(韓国)、南京医科大学、上海寄生虫学研究所、マラヤ大学(マレーシア)、マニラ公衆衛生大学(フィリピン)、ルフナ大学(スリランカ)、国立遺伝子工学研究所およびマヒドール大学(タイ)、マラリア寄生虫研究所(ベトナム)、トリプバン大学(ネパール)、バングラディッシュ農科大学(バングラディッシュ)世界保健機関アジア局、世界寄生虫学者連盟

諸外国の現状等

1. 現状

FAPメンバーを中心としたアジア諸国の連携機関で本課題の取組準備を始めており、韓国(ソウル大学)とはすでに共同研究体制が確立されている。

2. 我が国の水準

免疫抑制剤使用患者、エイズ患者、あるいは感染臓器移植による激症型原虫症や先天性寄生虫症など、高度先進医療における先進国型原虫症の研究では日本は現時点でアジア諸国に優位だが、韓国、中国が追い上げてきている。日本ではマラリア、日本住血吸虫症、フィラリア症の撲滅成功により、現在、これらの寄生虫症例の臨床的経験の点ではアジア諸国に遅れているが、基礎的研究(論文発表)では日本が優位である。国際特許取得の重要性と必要性の認識については、アジアの研究者は一般に低い。

課題の実施により期待される効果

日本が主役を担っているFAPを中心としたアジアの寄生虫症対策を進めることによる直接的貢献のみならず、以下の点における日本のリーダーシップ発揮に貢献すると考える。

1. アジア諸国の寄生虫症の集積・情報発信基地としての日本の役割
2. アジア諸国の国際特許取得での日本の指導力の発揮
3. 診断薬・治療薬など実用製品化に伴う日本の化学・工学技術のアジアへの技術移入
4. アジア諸国における若手研究者の育成体制の確立援助

課題実施体制

課題名 「アジアの寄生虫症へのアジア独自の戦略研究」
代表者名 「矢野 明彦」
中核機関名 「千葉大学」

平成 一 四 年 度	アジア各国への日本人研究者の派遣 韓国、中国、タイ、マレーシアへ日本人研究者を派遣。 ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成14年7月～平成15年3月	第1回Asian Parasitology編集会議 国内外の委員の招へい ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成14年9月 監修：多田功、編集長：矢野明彦	Home Pageの立ち上げ、 Online Journal の刊行 担当：高橋優三、平山謙二、 嶋田雅曉、有薗直樹 ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成14年7月～ 平成15年3月
	共同研究による国際特許取得指導班 担当：矢野明彦、Jong-Yil Chai ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成14年7月～平成15年3月	アジアの若手研究者育成班 担当：木村英作、Jong-Yil Chai, Khairul Anuar bin Abdillah ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成14年7月～平成15年3月	
	アジアの若手研究者育成班 担当：木村英作、Jong-Yil Chai, Khairul Anuar bin Abdillah ・担当機関 岐阜大学 ・期間 平成15年4月～平成16年3月	第2回Asian Parasitology編集会議 国内外の委員の招へい ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成15年6月 監修：多田功、編集長：矢野明彦	Home Page の管理、Online Journal の刊行 担当：高橋優三、平山謙二、嶋田雅曉、有薗直樹 ・担当機関 長崎大学 ・期間 平成15年4月～平成16年3月
平成 一 五 年 度	アジア各国への日本人研究者の派遣 ミャンマー、ネパール、ベトナム、ラオス、 フィリピン、インドネシア、スリランカへ 日本人研究者を派遣。 ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成15年4月～平成15年9月	「アジアの寄生虫症へのアジア独自の戦略研究」の国際シンポジウム ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成16年1月	
	第3回Asian Parasitology編集会議 国内外の委員の招へい ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成16年5月 監修：多田功、編集長：矢野明彦	アジアの若手研究者育成班 担当：木村英作、Jong-Yil Chai, Khairul Anuar bin Abdillah ・担当機関 岐阜大学 ・期間 平成16年4月～平成17年3月	Home Page の管理、Online Journal の刊行 担当：高橋優三、平山謙二、嶋田雅曉、有薗直樹 ・担当機関 長崎大学 ・期間 平成16年4月～平成17年3月
	共同研究による国際特許取得指導班 担当：矢野明彦、Jong-Yil Chai ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成16年7月～平成17年3月	「Asian Parasitology」編集・刊行 ・担当機関 千葉大学 ・期間 平成17年1月 監修：多田功、編集長：矢野明彦	

期待される効果

1. アジア諸国の寄生虫症の集積・情報発信基地としての日本の役割
2. アジア諸国の国際特許取得での日本の指導力の發揮
3. 診断薬・治療薬など実用製品化に伴う日本の化学・工学技術のアジアへの技術移入
4. アジア諸国における若手研究者の育成体制の確立援助